

---

# ノッポと妖精さん

針倉ヒトツ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ノッポと妖精さん

### 【Nコード】

N9364X

### 【作者名】

針倉ヒトツ

### 【あらすじ】

香坂武光こうさかたけみつと如月蒼きさらぎあおが送る、特にコレとってない適当な日常の光景。単に二人がイチャ付いて過ごすだけです。爆発しろ。

## 01 / 肉食系妖精、襲来

「せんぱいつ、おっつかれさまでえす！」

今日の部活を終えて一人廊下を歩いていると、そんなハイテンションな声と共に、左腕に女の子一人分の重み加わった。

「おっかし、おっかし、くっださつい、にゃあ〜」

そんな言葉が耳に届くと同時に、腕を抱く力がぎゅうと強まる。

本人的には女性の象徴たる胸を押し付けているつもりなのだろう。だが、いかんせん無い乳ではまるで猫のマーキングのようだった。

口調も猫系だった。

「…なんで後輩にたかられてるかね、俺は」

ちらりと視線をやれば、頭一つどころか二つ分ほど下に予想通りの顔。

癖つ毛のショートヘアにはつちりとした悪戯好きの瞳。眉毛はまるで描いたように綺麗だし、唇なんてぷっくりと膨らんだ桜色で思わず触れてしまいそうになるほどコケティッシュだ。そのくせ鼻筋は子供っぽく愛嬌を感じさせるもので、何とも庇護欲を掻き立てられる。

そして何より、新体操で鍛えられた細くしなやかなその身体。小柄なのにいちいち動作が洗練されているように見えるのは、恐らくそれが活きているからなんだろう。チラリと目を向けてみれば、スカート裾からは眩しすぎる太腿がすらりと伸びている。

目を疑いたくなるほどに姿形の整った、十人居れば十人全員が振り返るだろうトンデモ美少女。

そんな後輩が凡骨である俺の腕に身を預けていると言うこの状況。…周りからの視線で何とも居心地が悪い。

俺が肩身の狭い思いをしているのを見取ったのか、周囲に笑顔を振りまいてから蒼が気楽に言った。

「堂々としてればいーんですよう。せんぱい、ただでさえでっかい

んだから、それだけでもうバツチリ！」

「俺みたいな凡骨にや、んな凶太い神経通らんよ」

「骨はガツシリしてるのにねえ」

抱いている俺の腕をグニグニと捏ねながら、後輩が悪戯っぽく笑う。

「あーでも、いーにおーい…。繊細だからお菓子作りも上手なのかにゃあ〜」

再びマーケティングに戻った蒼は、期待するような声色でそう呟く。褒めてる心算なんだろうけど、男に向かって繊細ってのもどうだろうか。

「……………」

「……………せんぱい」

蒼の視線がぐさぐさと突き刺さるのが見ずとも解った。

こつちを見上げているだろう輝かんばかりの瞳に耐え切れず、俺は重い唇を開く。

「今日は、めっちゃシンプルだぞ？ スコーンとココナッツクッキー、合いのジャムが苺とマーマレード」

「ジャムもせんぱいの手作りなんですよね？」

「まあ、一応は」

「ふはああんっ！」

「……………」

感極まったように蒼が鳴いた。

「ああもうっ、あーもう！ せんぱいせんぱいつ、私のお嫁に来てくださいよーっ！」

「嫁かよ。っーか婿だる普通…って、いや違う、そうでなく」

「大丈夫！ 私頑張って稼ぎますから！ せんぱいは家でお料理してー、お掃除してー、お洗濯してー、三つ指とかしてくれれば、もうっ！」

…何が、もう、なのか。

…ってかそれじゃあ専業主夫だ。しかもダダ甘すぎる。俺がやつちや絵にもならんし。

「趣味じゃないよ。俺も適当に就職して、それなりに働いてだなあ……」

そう返しながら、絵になるであろう後輩でそのシーンを想像してみる。……が、何故だろう。留守番させていた飼い猫の散らかした部屋を片付けをしている自分の姿しか浮かばない。腕には当然のようにその猫をぶら下げながらだ。

そうして結局、自分が台所に立ち食事の支度までしていた。……どういうことだろうね。

「サラリーマンのせんぱい……ってことはスーツ姿ですねえ。ソソるなあ……」

「ブレザーとそう変わらんだろ」  
ペろりと下唇に舌を滑らせた後輩から、何となく目を逸らす。

うちの高校はオーソドックスなブレザー。ネクタイも当然締めなきゃならんから、将来的に考えれば慣れることが出来て丁度良い。

「パテシエにはなんないんですか？」  
ふと、袖をくいくい引きながら、蒼がさも簡単そうに言ってくれた。

「パテシエな。なる心算だったら高校でなく専門に行ってるよ」  
「せんぱいの作るお菓子、かなりイケてると思うんですけどね！」

……あ、専門行かれちゃってたらせんぱいに会えなかったじゃないですか！ 行っちゃ駄目っ！

「行っていないよ。テンションおかしいぞ、ちょっと落ち着けな？」  
「はい」

呑気な返事とともに、再び始まるマーキング。

……まあ、無い乳と言ってもそこはそれ。女の子特有の柔らかさは確かにあるもんで。

どうしてだか執拗に身体を寄せてくる後輩の態度には慣れてきた心算だったけど、やっぱり俺も健全な男なわけ。

「……」

「……う？ せんぱい、どーしました？」

思わず意識してしまい黙り込む俺を、蒼が不思議そうに見上げてきた。

「…いんや、相変わらず無乳だなあ、と」  
気取られるのも癪なので、誤魔化すように軽い口調で返す。

他の女子には絶対に向けられない内容だが、蒼はこういうのを気にしなくて済むから楽だ。

「むにゆう？ お菓子作りの材料ですか？」

「無い乳と書く。貧乳の下位だそうだ」  
クラスメイト談。

「あいたたー、返す言葉がないやー」

すりすりと身体を寄せながら、気にした風もなく蒼が笑った。

全く無い胸が唯一の欠点と言えなくもないが、トコトンまで整った姿をしているとそれもプラスに働くワケで。

セックスアピールの薄さからかメディアに凸高の妖精なんて銘打たれた後輩のバストは、本人いわく71のAA。

自己申告だから当てにはならない気もするが、…というかそもそも俺にはどれがどんだけの大きさなのかよく解らない訳だが、まあでもこの歳にもなっつてこのサイズってのは驚異的なのだと思う。逆の意味で。

「これがまたどういうわけか、まっつっつっつたく、育ってくれないんですよね」

俺の腕から身体を離して、蒼がぽんぽんと自分の胸を叩く。

揺れるどころか服の上からではあるようにすら見えないそのバスト。

「ちゃんとバランス良く食べてるか？ 運動…は問題ないだろうから睡眠足りてないとか」

「はっ、好き嫌いはありません！ 昨夜は8時間ぐっすりでした！ 牛乳もたくさん飲んでます！」

「日本人は牛乳の摂りすぎは良くないらしいな。吸収効率が悪いとか何とか」

「それが原因かもっ!？」

「いや、ただ単に腹壊すだけじゃないか？」

「…遺伝」

「かも知らん」

蒼の母親はスレンダーな美人らしい。となれば遺伝の説が濃厚だが…。

「でもでもっ、体操やってる人って胸が大きい人少ない気がするんですよ。やっぱり関係あるんでしょうか!？」

「そりゃ知らん」

そう聞かれても蒼に知り合う以前の俺は、新体操に対して「そっぴゃそんな競技もあつたっけなあ…」程度の認識だったわけで、ぶっちゃけ今になっても体操界の女性は勿論、男性の名前一つとして浮かばない。胸のことなど論外だ。

しかしまあ、何で俺は女の子と乳談義なんてしてるんだろっね。しかも学校の廊下で。

女の人の胸って胸筋鍛えると減るのかな。…なんて、ふとそんな事を思った。我ながらアホ過ぎる考えだ。

「やっぱ揉んで女性ホルモンの分泌を促すしか…!」  
蒼が唐突に物騒なことを口にし始めた。

「……………さて、今日は野菜が安かったはずだから急がないとな」  
「せーんばいつ？」

矛先が此方に向かう前に距離を取ろうとして、あっさりと腕を抱え込まれる。

言われなくても解るが、それに関しては此方だって同様だ。でも言葉にしないと伝わらないのが人間だから、言い分はしっかりと口にしよう。

「揉まんぞ。そういうことは彼氏が女友達に頼めよ」  
「……………え、」

何気なく言った言葉に、蒼がビシリと身体を強張らせた。

何かおかしいなことも言っただろっかと首を傾げる俺に、ギギギ

…と長いこと油を差してないブリキ人形みたいな動作で蒼が見上げ  
てきた。

「………ちょ、ちょーっと待って下さいねーせんぱーい？」

いやいやまさか。そんな内心がアリアリと浮かんでいる顔。

やっぱりこの後輩のことはよく解らないなあ…なんて考えている  
と、蒼がくいくいと俺の腕を引きながら言った。

「あの、もしかしてなんですけど、ひよっとして伝わってません？

私、その…せんぱいのこと、好き、…なんです、けど………」

「……………え」

…え。

いやいや、いやいやいや。

ちよっと待て。

「ちよっ、ちよっとーっ！ なんですかその、え、って反応はあー  
っ………」

「い、いや待て馬鹿、落ち着け、馬鹿、何を血迷ってる！」

「ひどい！ なんで馬鹿呼ばわりなのっ！？ しかも二回！ っ

ゆーか、今まで散々アピってたじゃないですかあ！！」

「……………」

ひよっとして、あのマーキングのことを言っているのだろうか。

っというか良かった！ 今丁度周囲の人影が途切れてて！

「…いや、人懐こいやつだなあ…とは、………思ってたけど………」

「誰彼構わずくっ付きませんよ！ 私はっ！ どんな痴女ですかあ  
！………」

「す、すまん……っ」

まあ、その、自惚れっぽくて嫌だけど、好かれてはいるだろうと  
は思っていたけど。

「いや、まさかお前が、なあ………」

「なんでそんなに意外そうな顔するかなー。傷付くなー、もあーっ」

「すまん。何と云うか、お前と並んでる自分が想像出来なくて」

「……………並んでるじゃないですか、今」

ぷう…と頬を膨らませて、蒼が顔を逸らす。

…膨れっ面なのに不細工にならないのもスゴイ。

なんて、感心してる場合じゃない。

「…そういう意味じゃあ、ないんだけどな」

「……………解ってますけどね」

上手い台詞が浮かばずそんな言葉を口にする俺に、蒼が溜息を吐いたのが解った。

「まー、ほら、あれですねー」

そう置いてから、ポリポリと頬を掻きつつ蒼が続ける。

「私くらい可愛いと相手が遠慮しちゃうと言いますか…、こっ、雲の上の人に接するみたいなの？」

「…自分で言うかね。ともあれ、お前は神様の類だったのか」

「妖精…なんて、大層な渾名が付けられてますけどねー」

たはは…。とその顔に似合わぬ苦笑い。

あー…何と云うか…：失敗だ。かなり失敗した。馬鹿やらかした。

「で！ せんぱい、お返事下さい！」

「……………」

そしてこの切り替えの早さ。

ホント、この後輩は積極的だ。とても困る。

見上げる瞳がキラキラと輝いている。俺が悪く思っていないと確信した目だった。

こっこういう言い方はちょっとアレだが、蒼はかなり良い物件だと思う。

少々ちゃんまくて胸が無いが、それを補って有り余るほどの美貌の持ち主。しかも、そんな自分の容姿を鼻に掛けることなく、明るくて人当たりも良い。ちよつとした下ネタも余裕で流せる器量まで持っている。

考えるまでもない好条件の女の子だと言えよう。……………周囲の視線

さえ気にならなければ。

蒼は将来を期待されている奴だ。

体操の申し子とまで言われる運動能力とずば抜けたセンス。

…以前強く頼まれて、一度だけ差し入れと激励に蒼の演技を見に行ったことがある。

ずぶの素人である俺でさえ判ってしまった……決定的に違う、蒼と他の奴との空気。まだ一年だと言うのに、二歩も三歩も、蒼は同世代の選手達より先を行っていた。

このまま行けば、蒼は間違いなく大成する。下手したら世界に羽ばたくかも知れない。

コイツは、そういう女の子なんだ。

「せーんばい、難しく考えてるでしょ？」

「む……」

俺の思考を読んだのか、蒼が釘を差すようにそう言ってきた。

「そういうつもりは、無いんだけど……」

反射的にそう返しつつ、口籠るようになってしまう俺。…ハッキリと返せないってことは、そういうことなのだ。

当然、聡い蒼がそれに気付かない訳がない。

俺は思わず目を逸らしていた。

「……………」

「……………」

…ああ、嫌な沈黙をさせてしまった。

蒼を傷付けたい訳じゃないのに、上手い言葉が頭に浮かんでくれない。

だがそれでも、…それなのに、やっぱり心の何処かでは才気溢れる後輩に気遅れしてしまう。

自分と蒼とでは、つり合わない。分不相応だと、思ってしまう自分が居る。

それがずっと蒼が受け続けてきただろうジレンマだと予感している尚、俺はそう思ってしまうのだ。

「じゃあ、せんぱい。たいそうやめたら、つきあってくれますか？」  
つたない、ひらがなが、こぼれた。

その音は、ぞっとする程冷たく、俺の耳に流れ込んで来た。

「っ、馬鹿かつ！」

その意味を理解すると同時、弾かれたように蒼の顔を見る。

「……………」

俯き加減で見上げるその表情。普段の蒼とは正反対の、陰鬱なそれ。

…ああ駄目だ。蒼にこんな顔をさせては。

そしてそれ以上に、その言葉を使わせてしまったこと。その超ド級の反則技を、この後輩にさせること。それだけは絶対に、絶対に駄目なのだ。

反射的に蒼の肩に手を置くと同時に、蒼の両手がするりと俺の首に伸びた。

絡み、引かれた。

「私に目を付けられたのが運の尽き、です」

呟くように、囁くようにそう言われて。

「むぐ…っ!？」

…………… ああくそ、ちくしょう、やられた。

唇を重ねて、してやったりな色を浮かべる蒼の瞳に、ただただそう思う。

よくよく考えたら……………と云うより考えるまでも無い。蒼が、この後輩が、そんな卑怯な手で関係を強要する筈が無かった。

そんなことをしなくても……………やろうと思えばいつでもだ、蒼は俺をモノに出来るかと理解ってやがったのだ。

これは、ここまでのフリは。

「っ……………」

ただ並んでいるだけでは決して届かない、此方の唇に到る為のも

の。

「んふー」

それを証明するように、セカンド、サードと啄ばむように連続して唇を重ねてくる蒼の表情は喜悅一色。

蒼はちゃんと知っている。自覚しているのだ。自分の武器を。どう振舞えば、どう作用するのかを。

「ぶは…っ、…あと何回したら、ここは私専用になりますかねー？」  
言って、もう一度。蒼は唇を重ねてから、俺の下唇を甘く噛んだ。噛んで、噛んで、噛んで、じんと痺れて感覚が危うくなるまで噛んで、ちらりと俺の目を見上げてくる。

「う…ぐ…」

積極攻勢。蒼には妥協の一切が無い。

「せーんぱい…」

だのに、その潤んだ瞳は完全に此方へ決定権を委ねているのだ。

…例えここで俺が蒼を振るうとも、蒼はきつと恨んだりはない。唇を重ねた事を盾にもせず、またアプローチを再開するのだ。俺に彼女でも出来ない限りは。

「きよ、きよっは…」

ああくそッ、唇が痺れて上手く喋れない。ぐるぐると目まぐるしく意味無く思考が空回る。思わず蒼の細い腰に回してしまいそうになる手を叱責。

「今日は、そうだな、あれだ。ああ、何だかワツフルが作りたくなってきたな。うん、ジャムも丁度良いのがあるし」

そうして、そんな俺の口から飛び出したのは男としてあまりにも情けなさ過ぎる逃げの一手。

けれども蒼はそれを気にしない。

「きゃあん！ 私、せんぱいの作るワツフル、大、大、大好きなんですよー！ ください！ 全部くださいっ！」

いや、本当は気にしている筈なのだ。それでも蒼は俺の為に、俺に合わせて、その顔に笑顔を咲かせる。

万人を魅了するだろう華やかなその笑みは、無論俺も例外ではない。

「…欲張りだなあおい。俺が食べたくなつたから作るんだよ」  
確実に薄れて行く罪悪感に、自己嫌悪。

「じゃあ私、良い子にしてせんぱいのお部屋で待ってます」  
「っ…!?!」

そう言つて見上げて来た蒼の瞳がキラリと輝いたような気がした。その瞬間、背筋がゾクツと震え、どうしてか、まな板の上の鯉だか猫に捕まつた鼠だかの気分になる。

絶対防衛線。そんな言葉が頭を過ぎつた。

「へ、部屋には絶対あげんっ!」

「えー…」

形の良い眉を八の字にして、とんでもなく残念そうな顔をする蒼。妖精なのに肉食系とは是如何に…などと思いはしたが、蒼は妖精以前に猫だったので何ら間違いは無いことに気付く。

「……………、蒼」

「どーしました、せんぱい?」

色々ひつくるめて「すまん」と謝ると、「拒絶じゃないからいいですよ」と蒼は笑つた。

\*\*\*\*\*  
\*\*\*\*\*  
\*\*\*\*\*

「そーいえば、せんぱいつて好みの女性はどんなです?」

「あー、っと……………、まあ、なんだ、一般的な男が好むであろうアレ  
というか…」

「一言にすれば、巨乳つてことですね!」

「違うわ! …いや、違わくないが、大和撫子っつーか、しとやかな女性のことだよ!」

「私じゃないですよッ!?!」

「なぞひそひそで驚かすんだよね、お前は…」

01 / 肉食系妖精、襲来（後書き）

こんなやり取りが適当に続いていきます。

最近、暑くなるにつれて蒼のテンションが高くなって行くことに気が付いた。まあ台風が上陸する度に「せんぱーい！ 台風来ましたよーっ！！」とハイテンションでケータイに電話してくるような奴だったから、実際には七月に入って漸く気が付いたと言っのが正しいのだが。

……ちなみに、蒼は台風が来るととてもはしゃぐが、雷が鳴り始めると途端に震え出すという何とも難儀な性格でもあった。

「せんぱいせんぱい、もうすぐ夏休みですね！ 海行きましようよ海！ せんぱいのためなら私、清楚な水着からえっちい下着まで、もうっ、何っっでもござれですよーっ！！」

「……………。ああ、成る程なあ……………」

屋上の一角で弁当を突付けていた俺は、本日も襲来してきた蒼の、より苛烈になってきたマーケティングを受けながらそう得心する。

取り合えず、下着の件はスルーするとして。

海と水着。それ即ち絶好のアピールタイム。

「…………えへ、えへへへ……………」

蒼の頭の中では波打ち際で恋人ごっこ（「あはは〜までよ〜こいっっ〜」「うふふ、捕まえてごらんさあ〜い」という例のアレ）をしている俺達が上映されているのだろう、可憐な顔が完全に欲望一色で染まっていた。それでもその美少女っぷりが全く崩れていないのだから、とんでもない話である。

「じゃあGストリングで頼む。それだったら俺もまあ覚悟を決めなくもないような気がしないでもないこともまた吝かではないのではなかるうかと思う時もある」

「ほっ、ホントですか！？ 覚悟を決めるってことは、じゃあじゃあ、パラソルの下でオイル塗って貰ったり、ナンパされて庇って貰ったり、夕焼けの海岸で肩を抱いて貰ったり、そのままキスなんか

もしちゃったりなんかしてオツケーってことですよね!? もしや  
その先なんてことも……や、やだ、もう、どうしようっ、鼻血出  
そう……っ!」

遠回しなご遠慮願いますは鮮やかなまでにスルーされた。

「……………」

そして、いつも思うことなのだが、蒼はいつたいどれだけ俺が好  
きなのだろうか……。

隙あらば骨までむしゃぶってやると言わんばかりのその態度は、  
正直な話、引く。暑さからではない汗が背中に浮いた気がした。

「今日帰ったら、早速そのジーすとりんぐってやつを調べてみます  
ね!」

「種類に困ったらCストリングってのも良いらしいぞ」

共にクラスメイト談。

「なるほどー、ジーすとりんぐとしーすとりんぐですね。聞いたこ  
とないなあ、どんな水着だろ……。ジーすとりんぐ、しーすとりんぐ  
じー、しー、すとりんぐ」

俺としてもそのGやらCやらがどんな水着なのか知らないのだが、  
まあ蒼ほどの美少女ともなれば何だって似合うに違いない。学校指  
定の競泳水着だろうが可憐なワンピースだろう派手なビキニだろう  
が、それこそ蒼の言葉通り、何でもござれというやつだ。

そうして何度か繰り返した蒼は、「よし!」と自信満々に頷いて  
反復を終えた。

「あつ! せんぱい今日はからあげなんですなー、一口下さい!」

そうして、くるくるとよく動くその瞳が次に映したのは俺の弁当  
箱の中身だった。

ただでさえ大きくて魅力的なそいつが零れんばかりに開かれて期  
待に輝き出すと、嫌だなどと言えなくなってしまうのだから、とん  
でもない話である。テイクツー。

「元から一口サイズだよ馬鹿者」

言って、ずいっと弁当箱を差し出した俺に、しかし蒼はその貴重

なおかずに摘もうとはしなかった。

目を閉じて、軽く唇を開いて、僅かに身を乗り出して、

「あ〜ん……」

蒼は、無防備にその唇を差し出した。

「ぐっ……!？」

今度は間違いなく、どばっと冷や汗が出た。

身を乗り出す際に軽く開いた太股の間に両手を置く、その格好。

肩から腕のラインに掛けて出来た“しな”が、何と言うか……そう、堪らなくそそる。“狙った”のがありありと判るのに、桜色の唇から微かに覗く並びの良い白い歯が、付いた両手の左右で柔らかく形を変える健康的な太股が、俺の目をこれでもかと惹き付けるのだ。

「…………ツ」

理性vs煩惱。

その軍配は、……辛うじて、本当に辛うじて理性に上がった。

「……………こういうことも、あるうかと、ミニフォークを入れてあるから、それを、使いなさい」

「……………せんぱい、何だか最近つめたいですよね」

世間はこんな暑いのに、なんてのたまう蒼に、

「慣れてきたんだよ……………」

俺は大きく溜息を吐いた。

食後。

「ねえ、せんぱい」

「うん……?」

勝手に人様の身体を座椅子代わりにしている肉食系妖精が、首を後ろへ倒すようにして此方を見上げて来た。少し前に行われた衣替えによって、現在は男女共に生地薄い半袖のワイシャツ姿になっている。開放的に緩められた胸元から見えてはいけない可愛らしいフリルが覗き、慌てて視線を横に逸らす。そうして目に映った短い

袖から伸びる蒼の白い二の腕がまた妙に眩しくて俺は更に視線を逸らしたのだが、次はしなやかに伸びる太腿が目……と何とも情けないというか男らしいというか、強力過ぎる蒼の吸引力にそんな不埒な悪循環に陥った。

ぶつちやけ蒼は何処も彼処もが綺麗だったから、殆ど無意味な抵抗だった。

「そーいえば、前から気になってたんですけど」

俺の視線を迎え撃つ蒼の逆しまな素顔に、引っ繰り返しても美人は美人なのだなあ、と現実逃避気味にそんなことをぼんやりと思う。やろうと思えばキスの出来る距離だというのに、蒼は全く気にした様子もなく言葉を続ける。

「せんぱいってかなりでっかいですけど、身長は何センチくらいあるんですか？」

好奇心の塊のような瞳に若干気圧されつつ、数ヶ月前の記憶を遡ってみる。

「…えーと、確か春に測ったときは……189センチだったかな」

「でっかい！」

何だか物凄く嬉しそうにはしゃがれた。

「もーちよつとで190じゃないですか！もしかしたらもうなってるかも！？」

「かもなあ……」

気を付けないと扉の上の縁とかに頭をぶつけるから、出来ることなら縮んで欲しいところである。

「そういう蒼は幾つなんだ？」

「私の身長は春に149センチでした。あと1センチくらい良いじゃないって思ったので間違いないです」

そう口にした蒼が、不満そうに頬を膨らませる。…押してみようか、なんて思った。無論、やらないが。

「そつちも150になってるかもな」

「あと10センチとまでは言いませんが、もう5センチくらいは伸

びて欲しいんですよねー。中学の頃から、もう全然伸びてないんですよ」

そう口にした蒼が、タコのように唇を尖らせる。…摘んでみようか、なんて思った。勿論、やらないが。

「……………、そうか」

…さて、そんな風に馬鹿げたことを繰り返す思うのには、勿論理由がある訳で。

俺達の通うこの高校は、俺達自身が屋上に出ていることから判るように生徒達に屋上を開放している。夏とは言え、今日のように天気の良い日などは屋上で昼食を取る生徒が俺達も含めて多数居るのだ。

ならば、その屋上の一角で人目も憚らず、まるで恋人のように振舞う男女が居た場合、彼らの興味は当然のように其処へ向けられるだろう。

だが、それだけならまだ良いのだ。

もし、その二人が俗に言うバカツプルのな行為をしていたとしたら、果たして周囲はどう思うだろうか。

「せんぱい？ どーかしました？」

「……………」

個人的には、とても見つともなく思う。

和を重んじる日本人としては、そういう接触というかイヤ付きというか、それらは公共の場では自粛して然るべきものであり、自室などといったプライベートな空間でこそするべきだ。大々的に愛を叫ぶといったグローバル的表現が世間に浸透するようになってからも随分になるが、生粋の日本人である俺個人としては、やはりそれは粛々と育んでいきたいものだった。世間一般ではそれをヘタレだの草食系だののたまわれることもあるが、断じて違う。下品なのが嫌なだけだ。

「蒼、暑いから離れてくれ」

だからこうした物言いも、決してヘタレで遠回しにしたのではな

い。オブラートに包んだのだ。

「え、嫌です」

「……………、そうか」

「はいっ」

にべもない蒼の言葉に、俺は頭痛を覚えた。

仕方がないので、ハッキリと口にする。俺はノーと言える男である。

……………尤も、

「蒼、周りの視線が非常にシンドイから早急に俺から離れて欲しいんだ」

「え、絶対嫌です」

蒼は全く意に介さないので、意味は全く無い。

「……………、そうかあ…」

「はいっ!」

再び始まるマーキング。すりすり、まるで自分の匂いを擦り付ける猫のように、蒼の頭が俺の胸元に押し付けられる。蒼の頭の天辺でふわふわと跳ねる癖っ毛が開いた胸元を擦り、何ともこそばゆい。徐々に強くなっていく周囲の視線。好奇だの呆れだの嫉妬だのがたつぷりと混ぜ合わされたそれに、本日一番の溜息が零れた。

「フオローというわけじゃないんですけど、」

「んなツ!?!」

そんな俺を見かねてか、ふと蒼が俺の右手を両手で取りながら、その口を開いた。蒼は手に取った俺の右手をいとも容易く自分の胸元に押し当てると、それが何でもないことのように平然と言葉を続ける。

「これでもかなり、抑えてます」

「……………な、なんだと…?」

驚愕の告白だった。

戦慄する俺を余所に、蒼は「はふ…」と艶っぽく吐息を零して、言った。

「ホントでしたらね、真正面から向かい合って抱っこして欲しいくらいなんですよ？ 私はせんぱいの足に跨ってせんぱいの背中に手を回して、せんぱいはそんな私の腰を抱いて、ちゅ、ちゅってキスを」

「公序良俗に反するわっ！！」

思わず悲鳴のように声を上げてしまう俺。ぺったんこな癖に妙に柔らかな其処から、無理矢理手を引っぺがす。

慌てふためく俺に、蒼はくすくすと心底嬉しそうに笑いながらのたまった。

「イタリア式ラブちゅっちゅなんですよ」

「憤みある日本式にしてくれよ……」

がくりと肩を落とすのが既に日課となっている今日この頃。

俺は蒼がエスカレーターしないよう必死にその手綱を握りながら、救いの鐘を待つことしか出来ないのであった。

その日の夜、夕食を終え食後の珈琲を口にしてしていると、蒼からメールが届いた。

題名、Gストリング。本文無し。

俺は訝しむようにケータイを開き、

「ぶっ！？」

添付されていたその画像を開いた瞬間、口から珈琲を噴き出した。送られて来たものは、際どい、なんてレベルじゃない。水着としての機能の大半を放り投げたようなデザイン。水着というより帯と紐。それは、俺のような高校生のガキにはキツ過ぎる代物だった。

「あ、あんの馬鹿野郎……ッ！」

そうしてクラスメイトの一人に悪態を吐く俺のケータイへ、すぐさま蒼からの着信が届く。

「う……」

俺は神妙な気持ちと共に通話ボタンを押した。

「……も、もしもし？」

「せんぱい……」

蒼の第一声はそれ。

甘ったるい……蜂蜜とバターと練乳を混ぜ合わせてバニラエッセンスで香り付けでもしたかのような甘ったるい声で、蒼が俺を呼んだ。

「……くふっ」

抑え切れない悦びと興奮に蒼が艶っぽく零して、言う。

「今度せんぱいのお家に行くとき、下着代わりにコレ、着て行きま  
すね……？」

「……ッ！？」

じーとしーのどっちが……と口走る蒼に耐え切れず、俺は通話を切りケータイの電源を切った。

……その所為で後日、蒼が両方持って来るなどという凶事に見舞われることになるとは、この時俺は予想だにも出来ないのだった。

\*\*\*\*\*  
\*\*\*\*\*

「NGワードは季節感！」

「……何を言ってるんだお前は。……しかしあれか、俺達は実に40センチほどの身長差になるのか……自覚してみると凄いもんだなあ」

「そうなんですよー。だからキスするのがもう大変で大変で」

「背が高くて良かったなあ」

「せんぱい、すぐくつれないです……」

02 / えんじえー！ (後書き)

蒼はえろい子。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9364x/>

---

ノッポと妖精さん

2011年10月26日03時06分発行